



目指す生徒像に向かい意図的な指導を積み重ねる

～教育目標：We will be
優しさと強い意志を胸に学び鍛える生徒～



南房総市立嶺南中学校長 座間 弘之^{ざま ひろゆき}

永く高等学校に勤めてきた私は、昨年度から校長として初めて中学校に勤務することになった。

嶺南中学校は、平成26年4月、旧和田中学校と旧丸山中学校が統合し、本年度で開校4年目を迎えたばかりの新しい学校である。そのスタートにあたっては、「一つになる」ことが何より求められた。前任の初代校長は、町区を越えての教育の融合、集団の和、個の確立を目標に掲げ、統合中学校をスタートさせた。職員の頑張り地域からの応援を受け、二年の間に落ち着いた学習環境と生徒が活発に活動する学校に成長している。職員生徒が一丸となって新しい学校づくりに取り組んだ成果であると考えている。

統合の結果、学区はより広範囲になり、スクールバスを三路線運行して通学の足を確保している。

今まさに、学校づくりの真最中である。

1 生徒目線の教育目標

本校の教育目標は、題名にも記したように生徒目線のものになっている。一学期はじめの生徒集会では、生徒会役員が中心となって全校で学校教育目標と生徒会の年度目標を確認している。「一つになる」ことを大命題としていた学校だからこそ、教育目標を教師の指導目標のみにすることなく、生徒と共有しながらの学校づくりを進めてきたということである。生徒集会では、生徒が教育目標を連呼する姿を見ることが

できる。

そして、「We are 嶺南」を合い言葉に各行事、部活動等で一体感を育てている。

2 嶺南WAY（嶺南のやり方）

本校は、全国的にも数少ない教科教室型教育課程を展開している。授業は、担当教員が自分のもとへ来て受けるのではなく、自ら学びにいくのだという姿勢づくりを大切に考えている。生徒は、登校するとHB（ホームベース）と呼ぶ学級活動室で朝の会を行い、その後、1校時からの授業は、それぞれの時間割に合わせて教科教室に移動する。一日中、チャイムは鳴らず、各自で時計を見て動くことになる。教室の数には限りがあるので、教務が教育課程の特長を最大限生かせるように教室利用計画を管理しているからこそ展開できているのだと思っている。

また、集団的行動を多く取り入れ、コミュニケーション能力と社会性の伸長を図る取組をしている。BS（縦系列）活動を基本にしながら、全校体育、集団行動といった異年齢交流を積極的に行っている。

授業終了後には、15分間の「磨きタイム」と呼んでいる時間を設定し、学年集団を越えて、黙動清掃（校舎と心を磨く）グループと体力（心と体を磨く）グループに分かれ、一日のまとめの時間にしている。

本年度の全校生徒数は228名であり、BS（縦系列）に分かれての活動等において適正な人数であることも追い風となっている。

3 教師の姿勢を共有

学校づくりの基礎は教師の姿勢にあると考えている。それぞれが、常に学校改善を意識していなければならない。本年度、本校の標準学級数は、通常学級7、特別支援学級3の10学級である。しかし、目指す生徒像への伸長を期し、きめ細かな指導をしようという教師集団の意見により、ひと学年3学級編成での学級活動及び授業展開を行っている。個々の教師が、学校運営に参画する意識が高いのも、校長として頼もしく感じているところである。また、お互いが「認め合い、助け合い、高め合う」活力のある教師集団になろうと話している。20数名の教職員数であり、大職員室で空間を共有し、そこでは学年にとらわれず生徒の指導について教師同士で話し合い、課題解決に向けて取り組む様子を見ることができる。高等学校に多い準備室制の中で育った私には、非常に新鮮に感じられた。手の足りない教師のそばへ数名の教師が集まっている姿に心が和む。

生徒の脇に立っての指導もお願いしている。生徒の正面に立ってばかりの指導では、その子の背景は見えない。後ろから支えてばかりでは、自分で歩むことを忘れてしまう。時に、立ち位置を変えながら生徒を「その気」にさせていってほしいと考えている。

4 任意参加の部活動

本校では、放課後の部活動は任意参加としている。ここでも、自ら求める姿勢づくりを大切に考えている。部数は多くないが、96%の生徒が参加している。それぞれの活動は活発であり、県大会での活躍はもちろん、関東大会、全国大会で活躍する生徒もおり、学校の活性化に大いに貢献してくれている。また、部活動に参加していない生徒についても、学校外での活動に参加している生徒がほとんどで、サッカー、サーフィンを始めとして、中には世界大会（チアダ

ンス）で入賞した生徒もいる。

5 南房総学

南房総市では、「将来、南房総に残っても、離れても、どこへ行っても支えとなる、故郷への誇りと強い思い」を涵養していく南房総学を推進している。この地域では、高校進学を機に地域から離れていく生徒も少なからずいる現状もある。生徒は、小学校時代から地域を知り地域に学ぶ学習を積み重ねてきている。中学校区の校長連絡会（一中学校、三小学校）を持ち、子どもたちの育ちの継続化を強く意識している。そして、小学校との連携はもちろんのこと、地域の教育資源（人・もの）を積極的に活用し、学習の場を設定している。また、この連携をどこへ行っても通用する学力の向上にもつなげていきたいと考えている。

6 十五年教育

初めての中学校勤務の中で、発達段階を踏まえた指導の重要性を、改めて強く感じている。個々のバックボーンを的確に捉えた上で指導にあたること。地域の子どもを地域で育てることの重み。次から次へと課題を感じる毎日である。

現在、本校の隣接地では、平成31年4月の開校に向けて統合小学校・こども園の建設工事が行われており、校舎がそれぞれつながる。まさに、これから地域が融合しての15年間を通しての教育がこの地で始まろうとしている。異校種間での接続・連携を大切に、「優しさと強い意志を胸に学び鍛える生徒」に育てるべく、生徒への願いと想いを胸に日々の学校経営に向き合っていく所存である。

学校を
支える

地域とともに歩む大洲中学校

市川市立大洲中学校教頭

たけぎ しん
竹木 伸



1 はじめに

大洲中学校は市川市西部に位置していて、近くに江戸川が流れ、校舎の窓からは東京スカイツリーや都心、関東近郊の山々を一望することができる。

本校は本年度36年目を迎え、県内で唯一夜間学級が設置されている中学校である。学区には、乗降客の多い駅や繁華街、商店街もあり、新しく住民となった家庭が多い。生徒は温厚で、学校に好意的な家庭が多く、PTA本部の方々には学校の応援団として活動していただいている。

2 信頼される学校づくり

本校に着任して二年目である。生徒、保護者、地域の方々、教職員に恵まれ、充実した毎日を過ごしている。管理職となり、学校外に目を向けること、学校外の視点で学校を見つめることも多くなり、地域の学校に与える影響、地域の役割を実感する日々である。

本校の生徒は、学習や学校行事に意欲的に取り組んでくれている。しかし、学校が信頼されるためには、まず教職員が生徒から信頼されることが必要であり、生徒の授業満足度の向上こそ、保護者の学校への信頼につながるものと考えている。

本年度より、ノー部活デー（毎週月曜日朝練習、水曜日放課後）・ノー残業デー（毎週水曜日）が市内で一斉に実施され、水曜日に教職員が普段より早めに仕事を切り上げることは常態化しつつある。しかし、多忙化・多忙感の解消は、なかなか進まない。

そのような中、教職員の熱心な取組には頭が下がる。

信頼を損なわないために、不祥事の未然防止が日頃、話題となる。度重なる情報提供や注意喚起等は、一生懸命な教職員にとって、決して気持ちの良いものではない。しかし、現状を見つめ、自己を内省し「本校からは決して不祥事を出さない」という気持ちを新たにしている。そして、教職員同士コミュニケーションを密にして、明るく前向きな職場環境を目指している。

3 地域から学ぶ

今年度40周年を迎えた、ふるさとまつりは、自治会・子ども会・商店会・企業等と一緒に開催している。本校も生徒は準備から当日にかけて部活動やボランティアによる神輿担ぎや吹奏楽部の演奏等、PTAは自治会や商店会とともに準備に一か月前から携わっている。地域を挙げてのまつりであるため、生徒のまつり・地域への愛着度も高い。

また、夏に二日間にわたり開催される自治会盆踊りや秋の運動会は本校会場となる。自治会役員の方は高齢化が進み、準備等で生徒や教職員も出来る範囲でお手伝いをする。

自治会役員の方は、多くの生徒と幼少期から顔見知りである。少年野球で面倒



ボランティアによる神輿担ぎ

を見た生徒を中学校や高校での野球大会にまで足を運び、応援して下さる方もいる。必要な際には叱っていただける。教職員の三年間より、はるかに長い年月を、生徒は地域で過ごし、地域とともに歩んでいる。

先の盆踊りでは、本校の生徒が参加した地域の子どもたちに、お土産を配る手伝いをしたり、並ばせたりと地域の方を自然に手伝う姿を目にする。地域の方も生徒に自然に声をかける。教職員も地域の方との会話が増え、地域や生徒理解につながっている。

本校では地域清掃ボランティア活動を年に2回行っている。8月の市川花火大会翌日の江戸川河川敷ゴミ拾いと12月の土曜日に実施するクリーングリーンマイタウンである。いずれも多く生徒や保護者、教職員、自治会、地域の方が参加している。特にクリーングリーンマイタウンには、学区小学生の参加も多く、中学生が各地区のリーダーになり、先頭に立ってゴミ拾いを行う。小さな子どもから高齢の方まで、幅広い年齢層の方が一堂に会すことは、自然と異年齢層とのかかわりが出来、生徒だけでなく教職員にとっても社会性の向上がある。

ゴミ拾い後には、大洲中ブロックコミュニティークラブの方から参加者に「すいとん」が振る舞われ、体を温めている。



参加者への「すいとん」を振る舞う様子

4 地域とともに

地域行事が活発であるがゆえに、地域から学校への要望、担ってもらいたい役割もある。地域行事は毎年のことであり、地域から見ると、学校の関わりは当然という認識もある。一方、教師は異動で毎年変わっ

ていく。

盆踊りは櫓が校庭の真ん中に1週間立つ。その間、練習場所を移動する部活動もある。

市川市花火大会では、校庭が桟敷席になり、仮設トイレも設置される。本校は近くに大洲防災公園があることから、校庭が市川市民まつりや市川市消防出初式等で駐車場になることもある。その為、毎年20日程度、自治会や市の行事等で校庭を使用している。天候によっては、校庭に轍が残ることもある。

教頭は地域と学校の接続部に位置している。地域の要望と学校の要望を汲み、いかに折り合いを持たせることができるか、常日頃考える。お互いにできる事とできない事がある。これまで地域の方々と関わってきたことから、学校側の視点だけで物事を考えてはだめだということに気付いた。地域に飛び出し、地域に協力する姿勢だけでなく地域の中の学校であるという意識が高まってきた。学校の役割とともに、地域の役割もある。

本校の生徒の良さは、教職員のがんばりとともに地域行事に限らず、日頃から地域の方々に見守られていることにも起因している。地域との連携・協力なしに学校運営を考えることはできない。

生きる力が、地域の中で自然に育まれることが本校の財産である。その良さを、教職員に今後も伝えていきたい。

5 おわりに

本校の学校教育目標は「心豊かで活力のある生徒の育成」である。教職員のひたむきな努力が生徒を通じて、保護者や地域へと伝播する。生徒が日々笑顔で、希望の登校、満足の下校となるよう、校長の指導の下、教職員とともに全力を尽くしたい。

学校を
動かす

学力向上に向けた取組

白井市立白井中学校教諭

うかい たけし
鵜飼 猛



1 はじめに

昨年創立70年を迎えた本校は、千葉県北西部にある白井市の中心に位置している。

学校のすぐ近くを国道が通っているが、周辺には多くの自然が今も残されている。

全校生徒は174名で、それぞれの家族や地域の方々に温かく見守られて学習活動等を行っている。

2 研究の実践内容

本校の継続した課題の一つに学力向上がある。この要因は様々なことが考えられるが、学校としてこの大命題を避けて通ることは出来ない。そこで研究主任と相談し、以下のような実践をしている。

(1)授業改善に向けて

本校の場合、学校規模が小さいため、概ね全学年を1人または2人の教員が見ている。また、数学では少人数指導を全学年で実施している。このため、教科内で授業を参観することが困難である。そこで、各種テストの結果を考察している。

具体的には、教科ごとの得点分布や観点別・領域別の得点状況といったデータをもとに教科・学年・全校における課題を挙げ、改善するための手立てを考えている。

また、「学習のめあて」「学習のまとめ」を明示した板書、生徒主体の「話し合い」「高め合い」の時間を意図的に取り入れ、方向を共有している。

(2)ドリル学習の教科の拡大

漢字の書き取り練習だけだったドリル学習に、数学・英語も取り入れて実施している。この際、特定の教科に負担が偏らないように学年で教科を変え、また配付するプ

リントを全校体制で準備している。また、意欲のある生徒に対しては検定試験の受検を促し、そのために時間を使うことも推奨している。

(3)家庭学習意識の向上

学校の授業だけで学習内容を定着させていくことが望ましいが、それが達成できない現実がある。そこで家庭学習で補うのだが、家庭学習そのものを行っていない、あるいは内容が乏しい生徒が多く見られる。そこで、家庭学習がなぜ必要なのか、どのように取り組めば効果的なのかを説明した配付物を作成し、各学級で説明をしてもらった。先生方の努力もあり、年度当初より改善しており、また学年が上がるにつれて内容の向上も見られている。

(4)Q-Uテストやピアサポートの活用

白井市として実施をしているQ-Uテストの分析の時間の設定や、ピアサポートプログラムを活用した人間関係づくりで、落ち着いた学習環境作りに努めている。

3 成果

これらの取組を学校として同一步調で行うことができるよう、計画を立案して実践を呼びかけるだけではなく、データ分析をして現状を把握し、実践が修正できるよう資料や情報の提供、更に話し合いの場を設定している。その結果、少しずつではあるが生徒たちの学力に現れてきていると感じている。これは生徒たちの努力と、先生方の協力があってこそその成果である。今後も生徒と教師が一体となった「チーム白井」として、学校が更に伸びるように尽力していきたい。

全員のチーム力が生きる研修を目指して ～研究主任二年目の挑戦～

野田市立山崎小学校教諭 やつだ み 谷田 なつ美



1 はじめに

本校は、これまで防災教育や国語科を研究してきた。その中で、「受容→気付き・判断→共有化」といった話し合い活動は、個々の表現力を伸ばし、考えを伝えるために有効であることが分かった。本校ならではの話し合い活動をYCT（Yamazaki Communication Tool）と名付け、定義し実践を重ね、目的や相手に応じて、自分の考えを表現し、伝え合う力を付けてきた。研究主題や研究教科が変わっても、これまで本校が培ってきたものを効果的に活用し、本年度は算数科に取り組んでいる。

昨年度、初めて研究主任となり、これまでの研究を引き継ぎ、新しい先生方と共に成果を上げることの難しさを感じた。研究主題の実現に向け、また先生方が「やってよかった」と思える研修を行うため、現在も奮闘中である。これまでの研修の取組を紹介したい。

2 研修の活性化に向けて

(1)校内研究会を充実

①4月の研修を大切にする。

「はじめが肝心」という言葉があるように、職員全員が同じ方向を向いて指導・実践・検証できるように、全体研修を行った。

②一人一授業で授業力を高める。

指導案検討会を繰り返し行い、講師に事前指導を受ける等、工夫・改善に努めた。

③PDCAサイクルを大切にする。

事前事後でアンケートやテストを行い、子どもたちの変容を把握した。また、課題を焦点化し、次の校内研究会では改善できるようにした。

④協議会を工夫し、全員の参加感を作る。

県総合教育センターの「小・中学校新任

研究主任等実践研修」のワークショップにおいて全員の参加を促し、話し合っている内容を視覚化し、共有化する手法を学んだ。その手法や本校のYCTを生かし、協議会では、活発な意見が交わされ、解決の糸口が見えるようにした。



⑤研修時間を確保する。

（毎週月曜日）

(2)校内研修の充実

①研修だよりを作成、適宜発行し、研修内容の共有化を図る。

②教師が学びたい研修を実施する。

年度当初にアンケートを取り、研究教科以外にも必要感の高い希望研修を行った。（図工、道徳、外国語活動等）

③モラルアップ研修・若年層研修を実施し、若手の育成に努める。

④外部研修で学んできたことを共通理解・共通指導するための場を設ける。

実践例を学んだり、アドバイスを受けたりする機会とした。

3 学びのフィールドを広げて

「人は人中、田は田中」ということわざがあるように、いつも自分を磨くことが大切であると考えている。私自身、学校内外の研修やセミナーに学びに行き、学校現場に還元できるようにしている。「私だからこそ、できる」授業や指導といった枠を越え、職員全員のチーム力が生きる学校でありたい。

授業を
創る

児童同士が学び合い、高め合う授業

東金市立鵜嶺小学校教諭

ふじかわ ゆ み こ
藤川由美子



1 はじめに

今年度、「千葉県音楽教育研究大会 東上総大会」の授業者と研究演奏の機会をいただいた。児童は、鑑賞で学んだ曲想と音楽の要素とのかかわり合いを生かして、歌唱や器楽の表現を積極的に工夫しようとしている。この研究授業では、友達と試行錯誤しながら更に深く思考し、表現できる児童を育成したいと考えた。そのために最も改善すべき点は、教師主導のぐいぐい引っ張る授業から、児童同士が学び合い、高め合う授業にすること。予想される児童の反応とそれに対する教師の言葉かけを何通りも考えた。しかし、つい言葉数が多くなってしまふ自分に深く落ち込む。「よし、次こそは。」と闘志を燃やし、授業の映像を振り返る。幾度もの公開授業を経て、児童により深く思考させるための言葉かけやタイミング、じっと待つことの大切さを覚えてきた。この授業研究を通して私は謙虚で逞しい鉄の女になった。この年でも成長できる機会を与えていただいたことに深く感謝している。

2 授業実践（第5学年）

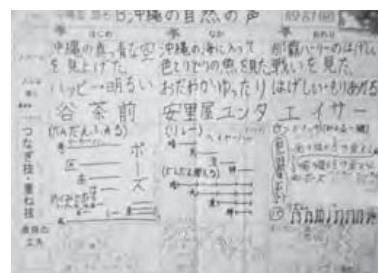
(1)鑑賞と表現の関連

日本の祭りばやし「ばかばやし」「すずめおどり」「関八州の和太鼓演奏」や沖縄の音楽「安里屋ユンタ」「谷茶前」「エイサー」を鑑賞した。曲想と音楽の要素との関連を発見し、曲のおもしろさを十分に味わった。児童は各自、好きな曲とその理由を音楽の要素を用いて伝え合った。

(2)イメージをふくらませるための工夫

音楽づくりで最も大切なのはイメージをもつことである。写真や映像を活用し、ど

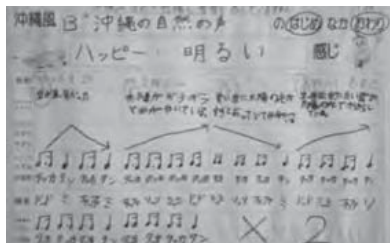
んな祭りばやし、または沖縄の音楽をつくりたいかの思いをもとにグループをつくった。設計図に「はじめ」「なか」「おわり」のストーリーや各場面のイメージを書き込んだ。



「沖縄の自然の声」設計図

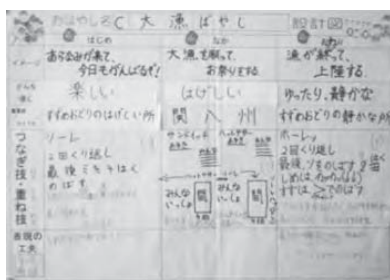
(3)ワークシートの工夫

鑑賞した「ばかばやし」「谷茶前」「安里屋ユンタ」の楽譜から、音の型、リズム、反復、変化などに関わる児童の気付きがあった。「音が隣り合っているよ。」「同じ音から上がっているのが繰り返されている。」「音の型が山になっている。」「ユンタはゆったりしイメージをもとにした旋律作りでいて音も長いね。」この学びを生かして全員が自分のイメージに合わせて一人1小節の旋律をつくった。苦手な児童も口唱歌を用いたり、参考となるリズムを表から選んだり、使う音に○をつけるだけにしたり、音の型が視覚的に分かるようにしたりして、簡単に記譜できるようにした。



(4)イメージを視覚化するための工夫

グループごとにつくった「はじめ」「なか」「おわり」のストーリーに合わせて、一人一人がつくった旋律や打楽器のリズムをイメージに合うように重ねたり、つなげたりした。



「大漁ばやし」設計図

その際、自分たちの思いや意図を設計図に書き込む。「大漁を願ってお祭りするはげしい感じだから、『みんないっしょ』『間』を繰り返してハッとする感じにしようよ。」

(5)自分たちの演奏の振り返り

日本の祭りばやしをつくったあるグループの録音をクラス全体で聴いて、演奏している児童も客観的に振り返ることができるようにした。その際、「はじめ」「なか」「おわり」の各場面の写真を提示したり、リーダーが設計図を指し、どんなつなぎ技・重ね技を使ったか分かるようにしたりして、聴いている児童が音楽をイメージできるようにした。その前に、他のクラスでタブレットを使って視覚、聴覚の両面から自分たちの演奏を振り返る活動をした。すると、明らかに耳からの情報に絞った方が児童は設計図と照らし合わせて深く思考できることが分かった。

録音した演奏を聴いて音楽をイメージに合わせるための工夫をみんなで話し合った。「機械じゃなくて手で苗を植えている感じだからもっとゆっくりがいい。」「おわりは、お米がいっぱい実って豊かな感じだから締め太鼓をスレーベルに変えた方がいい。」「いっぱいお米がとれて喜んでいから速くした方がいい。」「いや、豊かな感じだから速いのは合わない。」

(6)思考を深める工夫

「リズムを変えていいですか。」という質問があったが、「今日は音色、強弱、速度に絞って、もっと〇〇な感じにするにはどんな工夫が必要か考えよう。」と音楽の要素の焦点化を徹底し、思考が深まるようにした。

日本の祭りばやし、沖縄風の音楽の各2グループずつ計4グループが音色、強弱、速度に絞って工夫をした。思いを設計図に書き込み、子どもたちは積極的に演奏を試して比較した。

「長胴太鼓で杵打ちして明るい感じを出した方がいい。」「いや、皮の音色の



演奏を試して比較している様子

方がこの場面は合ってる。」(日本の祭りばやし)「鉄琴よりグロッケンの方が音を重ねたとき、はっきり聴こえて楽しいイメージに合ってる。」「もう少し木琴のばちをはねあげるように手首を使って優しい音にして。」「最後は盛り上がる明るい感じだからパーラックをクレッシェンドした方がいい。」(沖縄風の音楽)

日本の祭りばやしの一グループの演奏をもう一グループが聴く場面を設けた。すると、演奏者が気付かないことを客観的に聴いたグループが気づき、アドバイスした。「主役のリコーダーが聴こえないから、もう少し締め太鼓を小さくした方がいい。」

3 おわりに

児童は音にこだわり、自分たちの考えをぶつけあった。このような活動の中で、お互いを認め合い、高め合っていく。私は授業を通して児童の人間性を育成していくことが教師の使命だと改めて感じた。これからも全力で児童と向き合い、共に成長していきたい。

子どもを知る

気持ちを受け止める

市原市立惣社幼稚園教諭

もちつき
望月

ゆうか
優花



昨年度、本園に採用となり、4歳児の担任になった。憧れていた職業に就いたが、当初は上手いかないうことが多く、不安でいっぱいだった。自分の力不足を実感し、なぜ教師を目指したのか、どう子どもと関わればよいのか悩む日々だった。

そんな中、初任者研修を通し、遊びを通しての指導の在り方、保護者との関わりについてなど様々なことを学ばせて頂いた。多くの先輩や小・中学校の先生、同期の仲間からの保育に対する考えを聞くことで自分の保育に対する考えの幅を広げられたと思う。先生方の話を聞く中で、子どもの様々な気持ちを受け止め、前向きな子どもの姿勢を支えていくということが教師にとって大切なことのひとつであると感じた。

現在二年目となり、5歳児の担任をしている。物事に対する子どもたちの感じ方は昨年より複雑になり、どのように関われば子どもの成長につながるのか悩むことも多い。ある日、他クラスとドッジボールをした際、負けてしまい、「もうやらない」と投げやりになってしまう子がいた。そこで、気持ちを受け止め、悔しい気持ちが大切なことを伝えて励ますと、もう一度挑戦しようとする子どもの姿を見ることができ、大きなやりがいを感じた。

今後も、初任者研修で学んだことを生かしながら子どもと関わっていききたい。そして、子どもの気持ちに寄り添いながら関わることを心掛け、自分なりの指導方法を身に付けながら子どもと一緒に成長していきたいと思う。

子どもを知る

答えは子どもたちの中に

県立長生特別支援学校教諭

あだち
足立

なおゆき
侃介



昨年度、初任者研修で学級経営、学習指導、社会人としてのマナー等、本当に多くのことを学ぶことができた。また、子どもたちとの関わりの中で、「答えは子どもたちの中に」という、これから先ずっと、大切にしていかなければならない言葉を胸に刻むことができた。

私は初任者として子どもたちに指導・支援したり、授業を展開したりする中で「どういった手立てがベストなのか」「どのように授業を組み立てていけばいいのか」と日々悩むことがあった。悩めば悩むほど、目的を見失い、「子どもたちのために」という教育の根本から逸れていくような気がした。そのとき、先輩の先生に言われた「もう一度子どもたちとしっかり向き合ってください。答えはいつも子どもたちの中にあるから」という何気ない言葉が胸に響いた。その言葉を受け、もう一度子どもたち一人一人を見つめ直し、向き合うことで少しずつ自分の求める答えに近付いていくのを実感することができた。そして、それが子どもたち一人一人の実態に合った教育をするための一番の近道なのだと感じた。

私自身まだまだ経験が浅く、これからの教員人生で様々な壁に直面することがあると思う。しかし、今後も「答えは子どもたちの中に」という言葉を胸に、子どもたち一人一人と真摯に向き合い、寄り添っていけるような教師になれるよう精進したい。